



Title	研究センターとしての再構築
Author(s)	青木, 紀
Citation	子ども発達臨床研究, 1, 1-2
Issue Date	2007-03-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/20564
Type	departmental bulletin paper
File Information	KANTOU.pdf



研究センターとしての再構築

昨年4月、旧乳幼児発達臨床研究センターは、新しく子ども発達臨床研究センターとして発足することとなった。以降、新しいセンターの3部門（子ども臨床部門・子ども発達部門・子ども支援部門）は、それぞれ研究会やシンポジウムなどのイベントを開催してきた。また、子ども臨床部門を基礎に、文部科学省の戦略的研究推進事業として「軽度発達障害児・者に対する生涯発達教育プログラム」が採択され、いよいよ次年度から4年間にわたる事業が始まることも決まった。これらの動きからだけでも、これまでの旧センターの事業内容に比較すれば飛躍したといい。もちろん、その内実は、まだまだ不確定でもあり、これからの課題は多い。とはいえ、新しい研究体制は整いつつあるのは確実である。とくにスタッフは、専任3名、兼任3名、期限付き専任1名、それに上記の戦略的研究事業によって獲得される4名のスタッフ、あわせて11名となることから、その成果は期待していいと思われるし、生み出されなければならない。

上記のように、これまで各部門の動きはあったが、ようやく昨年12月、センターの3部門がそろったシンポジウムが教育学部大会議室で開催された。当初は大きな、対外向けの打ち上げ花火型の催しも構想したのだが、まずは「内部固め」を優先したいと考え、内輪から始めた。どんな組織でもそうだと思うられるが、新しいものに脱皮しようとするとき、しばらくはぎくしゃくするのは当然である。銀行や航空会社の合併を想像すればわかることだろう。しかもここは研究センターであり、研究者一人一人が一国一城の主でもあることや、これまでの「伝統」を考慮すればなおさらである。だから、まずは今日的なテーマを掲げ、それぞれの姿勢を示し、その「異同」をはっきりさせることが、今後の基盤固めの第一歩になると期待したのである。

そこで、文字通り「子ども発達臨床研究」の応用問題として取り上げたのが、このシンポジウムのテーマ「現代社会における子どもたちの“生きづらさ”を考える」だった。空中戦のような議論になることも危惧されたが、新しいセンターの名称にふさわしいものと合意された。個人的にも、この言葉については以前から気になっていた。というのは、臨床家だけでなく、教育学関係者たちも、「生きづらさを抱えた子ども」という表現を、なぜこうも頻繁に枕詞のように使うのだろうかと思っていたからである。もちろん、漠然とだが、よく言われる「子どもに寄り添う」という表現からすれば、この言葉は自然に口に出るのだろうと推測はしていた。だが当然のごとく、このテーマを公表するやいなや、教育学部内の先生たちからは、「われわれだって生きづらい」という言葉が返ってきた。

こういう発想なり反応の差異自体は、少し考えてみればわかるように、「問題を抱えた子ども」一人一人に焦点を当てている場合と、そうではなく、人々の背景や環境あるいは社会の構造といった点に焦点を当てて考えている場合との違いが、単純に表面に出てきたに過ぎないとも言える。とはいえしかし、そこには、なお相当の発想上の溝が横たわるのも事実であろうと受け止めた。

ともかく、このシンポジウムの成果を形に残し、新しいセンターの出発点にしよう、不十分なものでもまずはそれらを積み上げていこうと、新しい雑誌『子ども発達臨床研究』の発刊が決められた。この巻頭言もそのために書いているのだが、原稿の締め切りに迫られ、何気なくインターネットに頼ってみた。シンポジウムの時には司会という役割の気楽さから何もしなかったのだが、Googleで「生きづらさ」を検索してみたら、いっぱい関連するブログなどもあることを遅まきながら知った。また昨日（2007年

2月6日)のことだが、たまたまNHKの教育テレビを見たら、福祉ネットワークという番組で“生きづらさ”をテーマにした「こわれ者の祭典」という内容をやっていた。難病、引きこもり、障害、うつ病などに苦しむ人々の“生きづらさ”を吐き出せ、主張しよう、という内容だった。いいことだと思っただが、同時に、この背後にどれほどの“生きづらさ”を抱えていると思われる子どもや青年、大人がいるのかと想像すると、やはり事態は容易ではないところに来ているなど、あらためてこの言葉の重さをとらえなおさなければと思った。事実、私の身近なところだけでも、ニートなり、引きこもりといった呼び方に該当する人も指折り数えることができるからでもある。また、ついでにこれも初めてだったが、“メンタルヘルス”という言葉をやはり検索してみると、まず目に飛び込んできたのは大人向けの情報の満載状況であった。日本社会も、アメリカで自虐的に言われている「セラピー国家」という表現にふさわしいところに来たのかと思い、またR. N. ベラーの『心の習慣』のいう「文化現象としてセラピー」「政治とセラピー」といった内容をあらためて思い起こした。

ではこんな社会情勢の中で、今後このあたらしいセンターで何をどうすればいいのかと思うのだが、つまるところ、このようなシンポジウムにも掲げた、現代社会のさまざまな応用問題を解く努力を通じてその成果を発信していくこと、同時に研究者としての基礎的な力を個人がパワーアップしていくこと以外に、特別な方法はないと思われる。「応用」「臨床」と言うと、学問の基礎を軽視してはいけなと言われてそうだが、私の含意は、否が応でも子どもから大人までメンタルヘルスが社会問題になるような段階に日本が到達している以上、そこで生起しているのっぴきならないような問題の解決に積極的にコミットしようとするれば、子ども発達臨床研究センターのようなところが、もっともそれに取り組むにふさわしい場ではないか。ここでは、新しいセンターが「臨床センター」でもあるからこそ、それぞれの意見の対立をも当然なものとして受け止めながら、さまざまな研究者や実践家や当事者もまじえて、何らかの解決の道を模索する必要があるのではないか。しかしやはり、最終的には、個々のスタッフの基礎力や創造力や応用力が問われることになるだろうと言うことである。ともかく、私たちには今、幸いにもその場が“与えられた”のである。こんなエキサイティングな仕事は、今の世の中そう簡単には手に入れない“コーリング”（天職・天命）なのである。そんなことを念頭に置いて頂ければと思う。

さらに、「研究センター」である以上、研究上の最先端を走らなければならないという責務があるが、そのチャンスも与えられていることにも自覚的であってほしい。もちろん、私たちのおかれている環境は、研究科附属の研究センターでしかないという制限もあるかもしれない。だが、大規模なセンターでしか行うことができないようなものでもなく、流行に流れるのもなく、より確かな基盤に基づく、小粒だが創造的な方法、革新的なアプローチで課題に取り組んでほしいと思う。互いに、臨床や実践をやっていけばいいというものでもなく、実験して統計的処理をやっていけばいいというものでもなく、基礎という名目で抽象度の高い解釈していけばいいというものでもなく、それぞれの方法で、それぞれの部門と個人がinteractionしながら、ことの本質に迫ってほしい。その成果を一人一人のスタッフが主張して行ってほしい。研究センターの成果と名声はその結果として生まれてくる。この創刊号が、そのきっかけの一助となれば幸いである。

(センター長 青木 紀)